平成２１年度　学校評価書

学校名	兵庫教育大学附属中学校

１　学校教育目標

人生をたくましく豊かに生き抜くために、考え、鍛え、行動する人間の育成
- ○　生命を大切にし、自他の人格を尊重し合う生徒
- ○　ものごとを真剣に考え、進んで行動する生徒
- ○　心身を鍛え、強い意志と体力をもつ生徒
- ○　豊かに感じる心をもち、表現できる生徒
- ○　たがいに信頼し、共に助け合い磨き合う生徒
- ○　社会に積極的に、奉仕する生徒

２　本年度の重点目標

（１）学習指導について
- ・「確かな学力」の定着を図るため、学習指導方法や学習形態などを工夫する。
- ・平成 24 年度の新学習指導要完全実施に向けた、教育課程の移行を鋭意進める。
- ・情報リテラシーの育成をめざすとともに、情報モラル教育を推進する。

（２）生徒指導について
- ・生徒指導体制を確立する。（生徒指導部会を定期的に行い、統一した生徒指導・生活指導ができるようにする。）
- ・教師と生徒の信頼関係を深め、生徒間相互の望ましい人間関係の構築を図る。

（３）学年・学級経営等について
- ・学年経営の基本方針を明らかにし、各教員の力を結集して学年経営の充実を図る。
- ・学年主任、副担任の学級への支援体制を確立し、学級経営を充実させる。
- ・保護者との連携強化（学級懇談会、学年懇談会の開催）

（４）教育研究について
- ・研究体制を確立し、全教員が研究授業を実施するとともに職員研究会の充実を図る。
- ・教育研究の成果を発表する。（研究発表会の開催）
- ・大学との連携を密にし、教科学習等の充実を図る。

（５）実地教育について
- ・実地教育について共通理解し、計画的な実習が行えるよう指導を工夫する。
- ・大学授業への対応を図る。

（６）道徳教育について
- ・人権意識を
高める道徳教育を推進する。（「道徳の時間」を要とした計画的な学習の実施）
- ・人間としてよりよく生きるための基本的な心構えや行動の仕方について学ばせる。（命の尊さ・自尊感情・思いやりの心・逆境に負けない強い心の育成）

（７）特別活動について
- ・望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図る。
- ・生徒が主体的に取り組めるようにする。（生徒会活動の活性化）
- ・生徒の主体性を生かした行事を計画する。（学校行事の精選をし、行事の企画運営のマンネリ化を回避し、行事内容の充実を図る。）

（８）その他
- ・教職員としての使命感と高い倫理観を持ちながら、豊かな人間性の涵養に努め、専門性と実践的指導力の向上を目指し、研究と修養に努める。

３　自己評価結果（達成状況）【Ａ：達成している　Ｂ：概ね達成している　Ｃ：あまり達成していない　Ｄ：達成していない】

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
教育活動	「確かな学力」の定着 生徒の実態を的確に把握し、個別指導やグループ指導，繰り返し指導などを充実させて、基礎的基本的な学力の確かな定着を図る。	意欲を増す授業の導入，技能の習得，結果をもとにした思考，知識の整理が概ねできた。 言語事項の指導では、ドリル的・小テストの継続などで成果が得られた。	B	個⇔グループ学習⇔全体での表現・深い思考による学習と、しだいに「学びのスタイル」が確立されつつあるが、今後より一層の研究実践により定着を図っていきたい。 一例として、同じ漢字が別場面では使えないことがあり、活用力を伸ばす指導の工夫が必要である。
	「思考力・判断力」の育成 コミュニケーションによる思考を育む授業を行い、学び合い，高め合う授業作りに努める。	まず自分で考えを整理しながらグループ内で話し合い、さらにそこから個人の思考を深め整理させることができた。	B	「発表＝理解」とは言い切れない生徒もあり、読解力を伸ばすことがもっと必要だと思われる。 評価の客観性が難しく、特に、興味・関心・態度に関する評価は、継続課題でもある。 ペアーやグループで学び合いをする意義を感じられるような学習内容を展開していきたい。

４　分野・領域ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
【評価全体について】 ・個々に Ａ～Ｄ という評価はしにくい面があるが、評価全体をみると、Ｂがほとんどだが、すべての分野において、綿密な計画と準備がなされており、もっと Ａ の評価があってもいいのではないか。Ａ の評価をつければ目的が達成され、終わりのように思いがちだが、達成することで、次にすべきことが見えてくる場合もあるのではないか。 ・出来て当たりまえと思われがちで評価が自ずと厳しくなっているのではないか。

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
教育活動	道徳教育 生徒の実態をふまえ、適切な主題設定を行い、より価値を深める学習を実践していく。	１つの教材で、じっくり考えさせて意見をださせ、互いの考えや思いをやりとりすることができた。 人格形成のための「信頼」「礼儀」「尊重」など、深まりのある授業ができた。	B	授業つくりは毎回難しく、どの程度授業内容から心の内部を高めることができたか，実践力がどの程度ついたかなど、不透明な部分もある。授業後の振り返りを学年教師や全教師間で行い、さらなる改善に努めたい。	【教育活動全般】 ・中学生は１年間で大きく成長する時期でもあり、中１と中２ではクラスの雰囲気が大きく違っているように感じた。 ・教え方を非常に工夫されていることに感心した。 ・ふれあいルームの設置は非常に良いことだと思う。
	人権教育 人権意識を高める授業を展開し、人権感覚の備わった生徒の育成に努める。	授業の展開は「道徳教育」と同様で、深まりのある授業が展開できた。 「人権作文」の全生徒に書かせ、文化祭当日に人権作文発表会を開催することができた。	B	「道徳教育」と同様、ねらいに最適な教材選別と深まりのある授業展開を工夫し、授業後の振り返りを積み重ねていく。 教科や学活など、あらゆる教育活動の中に「人権」に関わることはあり、教師自らが、研ぎ澄まされた人権感覚を持ち合わすことができるよう、日々研鑽に取り組んでいく必要がある。	
	特別活動・学校行事 生徒会を中心に生徒一人一人が主体的に取り組めるよう計画し、自主的・実践的な態度を育てるとともに、学級，学年，縦割りグループ，全校などの様々な集団を構成する中で、目標に向かって努力し達成する喜びを味わわせる。	体育祭，文化祭など、生徒会を中心に計画準備，取り組み練習などを進め、附属中独自の行事を作り上げているとともに、生徒の中に充実感や満足感を生み出している。	A	教育課程において、特別活動や学校行事等に割く時間と内容を再検討し、教科時数の確保とも関連づけて考えていきたい。	【特別活動・学校行事】 ・青少年の健全育成にとてもいい活動と思う。 ・規律、ルールを守ることを学ぶいい機会ではないか。 ・（提案として：実施されているかもしれないが）飯盒炊飯で食事をみんなで一緒に作り、食べるというのは情緒豊かな子供を育むのにいいと思う。最近はキレる子供が多いが、それらの防止にも効果があるように思う。 ・立志式は実社会においても、子供から大人への扱いを受ける年代であり、その時期に、自立や大人としての自覚をする機会として非常に良い式典だと思う。
	情報教育 教育機器をうまく活用しながら、教育効果を上げるような努力をしていくとともに、情報社会に適正に参画する態度（ルール。マナー）を身につけさせる。	白板の設置に伴い、スクリーン代わりに活用でき、モニターで教材提示しながら、その上から書きこみもでき、従来の黒板以上の効果を挙げている。 全校集会などで、情報モラルの徹底を図っている。	B	様々な教育機器が、各教科や学年，学校全体で保管されていて、教師個々で活用はなされているが、学校全体的な使用にまでは広がっておらず、もっと工夫した活用によりさらなる教育効果を生み出すことができると考える。 情報モラルの徹底については、事あるごとに視覚に訴えながら、その態度の育成に努めたい。	
学校運営	学校組織運営 学校長のリーダーシップのもとに、全教育活動にわたって円滑に、創造的に実施できるよう、能動的な組織体制をめざす。	昨年度末より、本年度に向けての全教育活動の見直しや計画準備を行い、順調に推進できているように思われる。	B	本年度末にも校務分掌ごとに「成果と課題」を明示し、さらなる附属中教育の前進につなげたい。また、校務の円滑化，有効性を検討することも含めて、校務分掌表そのものも見直してみる必要がある。 学校のねらいとする方向を全校生徒及び保護者に明示するため、「学校便り」などの通信発行も検討していきたい。	【学校運営全般】 ・この分野は比較的、評価委員で評価をしづらい分野のように思う。
	学年経営 学年経営の基本方針を明確にし、各教師の力を結集しながら、望ましい生徒集団の育成を図る。	１か月に２回の学年会を母体に、学年経営計画→次教育実践→反省（成果と課題）という流れで推進している。その結果、落ち着きのある前向きな生徒集団に育ちつつあると思われる。	B	今以上に計画性があり、ねらいを明確にした教育実践を積み上げていくために、学年教師による「学年会」を充実させ、学年教師に加えて教科担当教師とも連携を密にして、最大効果を生み出すような実践につなげたい。	【学級経営】 ・Q-U 結果を活用した学級経営を行われていることに興味をもちました。 ・Q-U 結果を活用することで、どのような成果があるのか、その検証がなされているのか興味があります。（例えば、３学期に再度 Q-U 結果を分析すればどう変わったかなど）
	学級経営 教室内の環境整備に心がけ、生徒が前向きに学習したり活動できるよう、学級経営の充実を図る。	教室内の物品設備の改善を図っていただき、その上に、各担任や生徒の創意工夫で、生き生きとした教育環境が創り上げられている。対話をもとにした学習活動が展開できている。	B	学校全体や学年，教科等での授業参観などを積極的に行いながら、「学級経営」にも話を広げ、有意義な研修を図っていきたい。 学年会を母体に、「Q-U 結果」などを使った学級経営の検討会などを持ち、学年教師全体でバックアップしながら、各学級の指導の方向性の明確化を図りたい。	
	保護者との連携 担任の先生を窓口に、保護者との連携を深め、学級及び学校への教育的支援体制を作り上げていく。	今夏に実施した PTA 愛校作業や数回の授業参観などに多くの保護者に来校いただき、保護者の教育意識の高さとともに多大の支援をいただいている。	B	保護者からかかってくる電話一本への丁寧な，細やかな対応に心がけ、学校の教育スタンスを明確に示し、さらなる連携を築いていきたい。 ３学期に授業参観やまとめ的な学年懇談会などがないため、来年度はその点を考慮して、学年と保護者とのパイプをより深めたいと考える。	【保護者との連携について】 ・保護者には、出来る限りの情報を提供することが、事前にトラブルを避けることにもなる。ホームページやメールを活用するといいのでは。 ・社高校では、保護者にメール配信の登録をしてもらい、情報をどんどん提供し効果を上げている。（社高校での保護者の登録は７０％程度）インフルエンザが流行した時には、大いに活用した。 （配信したメールを返信してもらい生徒の状態を確認できたりもした。） ・附属中は広域から通学してくるので、メールでの情報伝達は効果的ではないか。すでにある、じんじんメールの活用を願う。

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
学校運営	生徒指導（規範意識・態度） 学校や社会でのルールやマナーについて、全校生徒が共通の資料で学習を進め、正しい実践力の定着に心がけさせる。	本年度のスタートで、「本校の約束事やルール」という冊子をもとに、全校集会の場で、指導の徹底が図られたことが、一年を通して大きなプラス効果をもたらした。	B	やはり、全教師がこの冊子をもとに同じ目線での指導の徹底を図ることで、同一指導を心掛けたい。 生徒指導委員会での議論を活発化させ、的確で先手を打つような生徒指導を目指したい。 １か月に２回ほど計画されている「学年終わりの会」や１カ月に１回の「全校集会」の場などで、全校生徒に啓蒙していきたい。	【実地教育】 ・多くの実習生を受け入れることは、生徒への授業の影響も大きく、大変なことのように思うが、附属中学校としての役割を果たしていることでもあり、評価できる。 ・保護者の理解もあるように思われる。 【大学・附属学校園間の連携】 ・附属中なら出来ていて当たり前という前提で、評価が自ずと厳しくなっているのでは。もしくは自ら高いハードルを設定しているのではないか。 ・幼、小、中一貫の教育が本来売りではないのか。
	生徒指導（内面的理解・共感） 一人一人の生徒の内面を共感的に理解し、人間的ふれ合いに基づいた指導を継続しながら、信頼関係を深め、生徒間相互の望ましい人間関係の構築に努める。	今の学びのスタイルから全授業内において、教師⇔生徒間，生徒⇔生徒間で少しつつ内面的理解・共感に結びついてきている。 教育相談日の設置，日々の生活設計ノートの活用など様々な実践ができた。	B	今まで同様、毎時の授業の中でグループ学習を取り入れることから、互いに「学びあい、高め合う」ことにより、望ましい人間関係をさらに広げていきたい。 「学校便り」「学年通信」「学級通信」などを活用したり、道徳や総合的な学習のまとめを協力的に行うことを通して、さらなる人間関係の構築に努めたい。	
	実地教育（教育実習） 学校教育センターや大学の先生方と密に連携を図りながら、実習生への指導を充実させ、教科特有の指導法や本校での教育研究とも関連した指導などを伝授する中で、教師になる素養を高めていく。	実地Ⅲの教科実習指導は、5～6 月に学部生，10 月に院生に対して充実して実施できた。本校での「学び合い，高め合い」の授業も踏襲しながら、綿密な指導のもと、実習生も着実に技量を高めることができた。	B	実地Ⅲの教科実習指導は、今の方向性を堅持しつつ、新たなものを上澄みしていけばよい。 実地Ⅴの特活，行事に関わる実習では、最適な実習時間帯に来校できる学部生が少なく、教師側が意図したことがなかなか伝わらない。また、大学の選択授業に相当する「サポート実習」には１名の学部生しか選択しておらず、附属を通して中学校を知り、今後の実践につなげるということが、ますます難しい状況と感じる。	
	大学・附属学校園間の連携 附属学校運営委員会での方向性をもとに、大学及び附属学校園間の連携を深め、効果的な教育活動をめざす。	大学の先生方に受け持っていただいた「２年選択授業」も６年目となり、生徒にとって学びの本質を感じ取ることができた。 三附属校園間で、各分掌や教科ごとに少しずつ連携を図る取り組みがなされた。	C	大学の先生方との連携においては実質上細り気味ので、太いパイプとなっていない。やはり、附属中側から「何で連携をしたいのか」「どうやってつながりを太いものにしていくのか」を考え直し、早急に実践していかねばならない。 三附属校園間においても、互いに多忙の中、日程的，教育方向性に無理があったりして、連携が形式化，形骸化している。本音で話し合う必要があるように感じる。	
研究活動	研究体制の確立 研究体制を確立し、多くの研究授業を実施する中で、職員研究会の充実を図っていく。	研究部会を中心に計画を立て、特に１学期には積極的に研究授業と反省会を持つことができ、教師間の力量アップにつながっていった。	B	一年間を通して、もっと多くの研究授業の実践を積み上げ、絶えず自らの授業の見直しを図っていきたい。研究会後の反省会を大切にし、常に新鮮な目線での意見を尊重しながら、自らの授業改善に心がけたい。 全教師で研究の根底にある教育書物，哲学書物を読み合いながら、学びの本質を探り求めたい。	
	研究発表 研究発表会を開催し、教育研究の成果を公開発表する。	本年度は、インフル流行による学級閉鎖が発生したため、研究発表会は中止となったが、充実した内容の研究紀要が出来上がり公表できた。	B	本年度はやむを得ない状況が生じてしまったが、研究発表会を 10 月実施としているため、実際に研究発表会後から新たな研究のスタートを切り、年間の教育研究計画とその実践を確実なものにしていきたい。	
	指導力の向上 大学の先生方との連携を密にしながら、教師として指導力の向上に努め、全教育活動において一層の充実をめざす。	本校教師間での指摘や大学の先生方からの示唆などをいただきながら、少しずつ教師としての指導力向上につながっている。	B	まだ特定の教科に限られていたり、連携の回数が少なかったり、本校教諭からの意図した連携であるのかといった点に疑問符が付く。「大学・附属学校園間の連携」とも相まって、附属校でこそでき得る重要なことと言えるので、もっと前向きに実践していきたい。	

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
安全管理等	健康・安全教育 絶えず自分の健康に意識を持たせ、保護者や学校医とも連携を図りつつ、健康教育を推進しながら、食生活の基本を身につけ、自ら健康管理に生かす生徒を育成していく。	保健体育の授業，保健だより，集会での健康面での話など、健康や命に関して十分な全体指導ができた。 個々に持病のある生徒は、保護者や主治医とも連携を図り、教職員にも周知徹底できた。	B	１学期の新型インフルエンザ（以下、新インと略す）による休校措置、２学期の約２ヵ月間に及ぶ新インによる学級・学年閉鎖という、予期せぬ事態が発せした。生徒への予防対策の呼びかけと実践，保護者への家庭での実行のお願い，校舎・教室内の消毒活動などを行った。まだ、こういった点が完璧ではなく、徹底実施する必要がある。 また、今までの「健康・安全教育」の実践はさらに充実をはかりながら推進していきたい。
	防災教育 附属学校園における安全確保及び安全管理の手引きに基づいた訓練や学習を実施し、常に防災意識を高めておく。	「火災発生」「不審者侵入」に対応する防災訓練を実施し、消防署や警察署の方々を招いて講話も聞き、常に防災への意識を高めるようにした。	B	今までの防災教育を継続して実践しながら、毎回の反省をもとに改善も加えていく。 県内では、2009 年度に豪雨による大災害も発生した。このように、「集中豪雨」「大地震」なども想定した防災教育が必要に思われ、教科教育，総合的な学習などでの学びとも連携させて、様々な防災教育の実施を目指したい。
	施設・設備 施設・設備の定期点検と拡充を行い、教育環境を整備することから、教育効果をより高めていけるように努める。	附属中も創立 30 年をまじかに迎え、様々な施設・設備の改善を行っていただき、教育環境が整備されつつある。教育環境の充実に伴い、教育効果も上げつつあるように思われる。	B	今の環境整備を継続して実施していただくことを希望します。そして、そのことを生徒に還元すべく最善の教育効果を上げれるよう努力していきたい。 本校の本館２階の東端に、非常階段の増設を願いたい。生徒の命に関わる重要な案件です。

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
【防災教育】 ・不審者侵入、災害訓練は、毎年実施されており評価できる。実際に訓練することで、様々な想定での避難経路をイメージする訓練ができ、何かあった時に役立つものになる。